大学体育研究　25：1－17，2003

原著論文

我国における組織的なバドミントン活動の始まりについての予備的な検討

吹田真士

Preliminary study on the origin of organized badminton activity in Japan

Masashi SUITA

Abstract

The purpose of this study was to verify that Yokohama was not the place of origin of organized badminton activity in Japan. From a previous study done by Hirota, it has been told that Yokohama was the cradle of badminton. This study mainly used "The history of the past 60 years of Nagoya YMCA" written by Kinji Yoshimura, which was partly quoted from "Nagoya youth", and "The YMCA chronology" written by Masakazu Yasumura and "Yokohama youth" issued in October, 1933 (Showa 8) which included some evidence. From above, it was able to put up the following hypotheses;

1) The first time badminton match under a proper rule was introduced to Japanese participants at "the 1st school for physical education leaders" which was guided by F.H.Brown at Nagoya YMCA in November, 1919 (Taisho 8).

2) The origin of instructed organized badminton activity in Japan was a program held by Nagoya YMCA in 1927 (Showa 2).

1．問題の所在

昭和21年11月2日，日本バドミントン協会が創設された。爾来日本バドミントン協会の協会活動は，半世紀を越える。この間バドミントン活動は，会員の世代をおよそ2～3世代交代させながら，伝えられ・更新されてきたことになる。僅かな歴史の変遷とは言え，世代を2～3代更新してみると，その始まりを語ることが，二重三重の構造的な困難さを帯びてくる。不幸にして，日本バドミントン協会は，その創設の時においてさえその発起人の確定を巡る分裂を内蔵していた[1]。その上に，設立準備の集会における申し合わせと協会創立，それにその組織化完了の認識のズレが，時には協会創立時期の確定にすら，揺らぎを齎すことさえある[2]。

こうした歴史認識に関する揺らぎは，決定的な資料の欠落に由来するのであるが，それはまた，記録を正確に残すことのできなかったバドミントン関係者の“文化”と関わることの感覚や姿勢ばかりでなく，組織や活動を通して対人的な関係を形成していく成熟度そのものを示すことにもなる。しかし，どのように日本バドミントン協会が不可視の始まりを含む過去を持っていたとしても，協会を支

える都道府県単位の支部協会もまた確実に半世紀以上の歴史を重ね，様々な動機から相次いでその歴史を回顧するようになり，その表れとして記念出版物を発刊するようになってきている[3]。

けれども，都道府県協会関係者においても資料を渉猟する習慣に乏しく，殊に我国のバドミントンの始まりに関しては，既存の物件を無批判に借用して記述しているため，結論めくが，誤りが反復され，反復された勢いの中で一つの'幻想の歴史'が誤って正当化されかねない趨勢を見せている。「我国におけるバドミントンの始まり」という考えは実に曖昧で，ラケットやシャトル等の用具の到来を指すのか，バドミントンの競技規則に則って行われた時を指すのか等も規定しないままに，'はじまり'が論じられているのである。本論では，後者のその時を求めて検討を試みるものとする。

都道府県協会の'協会史'に反復掲載される誤っていると思われる歴史記述の問題は，後に横浜 YMCA の体育主事を務めた広田兼敏に纏る「我国におけるバドミントンの始まりの歴史」について[4][5]にあると考えられる。実は，この問題の所在は「我国におけるバドミントンの組織的導入による活動の始まりの歴史」が，広田自らが語る「広田によってその幕が開かれた」とする説そのものの信憑性が極めて低いことに由来するからである。こうした歴史記述の問題は，体育におけるバドミントンの技術指導書においても同様にみられ[6][7]，あやふやな認識のままで歴史の伝達がなされていることは否定できない。日本のバドミントンの始まりを求めて，このことを検証することが，本論の目的の前提となる。

仮に我国のバドミントンの始まりが広田によるものでないとするなら，ではどのような契機で我国のバドミントンが始まり，どこで広田がこれに加わっていったのかを明らかにしなければならない。広田が我国のバドミントン活動の黎明期に大きな役割を担っていたことには，関係者の誰もが何も異議を唱えない事実であろう。しかし，彼が全ての始まりであるとする彼自身の主張には，どうしても不明な点がみられるのである。だがしかし，この主張を否定することは，彼自身の人間性や人格・信仰に及ぶ個人的な中傷への始まりを，当然含意しかねない。これは避けたい。問題を「日本での組織的なバドミントン活動の始まり」という現象の確認一点に絞って，歴史事実の確認を検討してみたいと考える。こうした研究の主旨に沿って，本論では，入手できたかぎりの資料の中で，主テーマを検討してみたい。

2．広田兼敏とその主張

広田兼敏について，その経歴の概略をまとめてみる。広田は，1899（明治32）年札幌に誕生し，1914（大正3）年3月京都工業学校夜間部林業科を卒業(横177)[8]，1919(大正8)年6月横浜 YMCA の職員となり，1922(大正11)年横浜 YMCA の体育主事となる。1924(大正13)年，神戸 YMCA で開催された震災後の「第1回主事養成講習会」(指導者；W.S. Ryan，奥村竜三ら）を受講者柳田亨（東京），小山（神戸）らと共に受講。1933（昭和8）年11月，横浜 YMCA においてバドミントン活動を始める(横559)[8]。日本バドミントンの組織的な活動の萌芽は，広田の経歴のこの期間内にあったと，まずは考えられる。この期間に起きた組織的なバドミントン活動の萌芽は，広田によって次のように語られている。

1）日本体育協会編『日本体育協会75年史』[5]：1921（大正10）年10月，休暇旅行を終えた横浜 YMCA 名誉主事 S.スネード氏(在日1913－30年)が米国 YMCA より寄贈されたバドミントン用品を持ち帰る。横浜 YMCA 体育主事広田兼敏氏(1899－1981)にこれを渡し，東京 YMCA にも分けた。(日本バドミントン協会編「バ

ドミントン講習会用テキスト」(昭27)を引用したによる)

広田の話を拾って書かれたこの記述には，プレーというものに視点を置いた時にこの出来事が日本人が初めてバドミントンと出会った時だという認識がある。他に広田自らの記述になる以下の資料がある。これが，彼の我国におけるバドミントンのはじまりに関する基本的な認識を示すものであろう。

2）『バドミントン界』[4]：バドミントンなるものが我が国で発足したのは遠く大正12年の関東大震災の前後の頃であったように思われる。この時代に横浜，あるいは神戸在住の外国人達が，自国から取り寄せた用具を使い，家庭の美しい芝の上にネットを張りめぐらし，レクリエーション式に楽しく打ちあっていたのを，たびたび見かけることがあった。

今にして思えば，これらが我が国におけるバドミントンの始まりであろう。昭和6・7年頃からと思うがまだ海水も清らかな横浜・磯子の海辺を眼下に見下せる，今の根岸台の「YC&AC」(明治時代からの各種のスポーツを我が国に取り入れた横浜在住の外人によるスポーツを主としたクラブ）の招きで，慶応大学をはじめ東京の各大学の初代ラグビー，ホッケー，アメリカンフットボール等が，あの素晴らしい広大な芝生のグランドからスタートした。これと同じく神戸にも「KR&AC」なる外人スポーツクラブがあった。東西この二つのクラブはそれぞれの正しいスポーツシーズンを守っていた。

バドミントンはウインタースポーツに属し，ホッケー，ラグビー等とともに10月に練習が始まった。シーズン最終期間の4月には東西チームが隔年に来て「インターポート」と称して，前夜は社交ダンス，翌日は試合，その夜は晩餐会を開いて親しみを交わしていた。今日でもこれは継続されている。

さて，そのころ横浜 YMCA にもバドミントン用具がもたらされた。名誉主事だった故 H・S・スネード氏が1カ年の休暇を終えて帰日したとき，持ち返って寄贈したもので，数本のラケットと水鳥のバーズ12，3ダースだった。

そこで，せっかくの行為を無にしてはと，数名の有志を集めて，初めて横文字ルールと首っ引きに，このゲームがいかなるものであるかを一通り勉強した。これが競技に興味を持った最初のことだったと思う。

多少，私事にわたるが，それから間もなく，昭和12年のベルリン・オリンピックを機会に私は洋行した。

我が国洋式運動の発足と指導に力のあった F.H.ブラウン氏，W.S ライアン氏（ともに北米 YMCA 体育学士）らのすすめや，実演のため来日したデンマーク体操の父・ニールス・ブック氏等との約束があったからだ。

ベルリンでは次回の東京オリンピック（第二次大戦のため中止されたのはご存知のとおり）に備えてフェンシングを学び，デンマークではブック氏が校長をしているオレロップ体育大での全コースのベストクラスを終え，オーストリアではサンアントンでスキーをした。

また，このブック氏の体育大学在学中は，自由選択のバドミントンでも校内リーグ戦に記録を残した。

そして校長の依頼により毎朝のように同期の学友，ジョン・グレイ（現カナダ YMCA 名誉主事）と組んで先生組の相手役をつとめた。この時の練習でシングルスはもちろん，ダブルスのダイアゴナル等，当時としては最高の技術を自然と身につけることができた。

さて，話は昭和の初年に戻る。当時，

私は山手の外人の総合学院（セント・ジョセフ・カレッヂ）の校長，フランス人ドクター・ガッシュの依頼により毎週二回，上級クラスの体育クラス並びにバスケットボールのコーチをしていた。

一方YMCAでは，帰国されたブラウン氏に代わり，横浜在住外人の希望により外人によるビジネスメンクラスを毎週火・金曜日，指導していた。このクラスにはYC&ACのプレジデント，ミスター・ヘセルタン氏をはじめ約30数名の外人が出席体育場をにぎわした。

たまたまバドミントンの話が持ち上がり，YMCAでもはじめたのなら一度，試合をかそう（ママ）ではないかということになったのである。

相手のチームは香港，カナダ，英国，アメリカ，ドイツ人等のミックスでいづれも経験済みの勇者ぞろい。練習ぶりを見ても勝負はないような気がしたが，いざゲームが始まると，全員意外に善戦，シングルスは6対0で，ダブルスは3対0と全勝の好成績の記録を飾ることが出来た。

敢て，長い引用を試みた。広田による「我が国におけるバドミントンの始まり」に関する最もクリアーで基本的な認識による記述だからである。この内容を彼の経歴とつき合わせながら，さらにYMCA関係の記録との関係を検証してみたい。ここまでの広田の主張は次の8点に要約される。

1）「我が国におけるバドミントンの始まり」は大正12年の関東大震災の前後である。【要件1】

2）先ず横浜・神戸在住の外国人によってはじめられた。【要件2】

3）用具は自国（外国人の）から取り寄せたもので，コートは家庭の庭に作られた。【要件3】

4）その頃を昭和6・7年と解釈すれば，昭和6・7年にYC&ACとKR&AC間のインター・ポートの催しの一つとしてバドミントンが行われた。【要件4】

5）この頃，横浜YMCA名誉主事H・Sスネードが休暇明けで米国より帰日，ラケット数本，シャトル12～3ダースを持ち帰る。【要件5】

6）有志を集めて，ルールを翻訳。【要件6】

7）間もなくベルリンオリンピックを契機に訪欧（昭和12年）。オレロップ体育大でバドミントンを実習。【要件7】

8）昭和初年，YMCAで帰国したブラウン氏に代わり横浜在住の外人のビジネスクラスを指導。この中にYC&ACのプレジデント；ヘセルタン氏がおり，たまたま出た話からバドミントンの交流試合が行われた。【要件8】

【要件1～8】までは，広田によって，いずれも我国のバドミントンの始まりに大きな意味を持ったとされる事柄である。しかし，彼の記述には，時間経過が前後すること，措定された要件の年月が確定されていないこと，等の大きな特徴がある。また，これらの中に登場する3人の外国人もまたその関わりが見えてこないままに，我国のバドミントンの始まりに某かの意味を持った人であるとされてきた。これらの幾つかの不明な点を検討することで，我国のバドミントンの始まりをいっそう明瞭なものに出来るのではないかというのが本論における方法である。

3．広田の主旨を検討する

「我国のバドミントンの始まりに関する記述には，幾つかの事実とは異なる問題点がある。これらの問題点は，資料に当たることなく，広田の記述や口述をもって歴史認識としてきたことに由来する」というのが本論の仮説である。以下，広田の語る内容を検証して

いきたい。

3－1）【要件1】我国のバドミントンの始まりが大正12年の関東大震災前後であるという問題

我国の初期のバドミントン活動は，YMCAを中心に行われていた。YMCA活動は主要都市を拠点に展開され，その活動の記録は拠点毎に主として『○○青年』という名称の月刊機関誌に残されている。例えば，『横浜青年』『神戸青年』などである。したがって，これらの機関誌を辿ることで，出来事とその時日について広田の記憶の中にある誤謬や曖昧さをある程度確認する可能性が残されている。ただし，その機関誌も，今日その全てが保存されてきているわけではない。YMCAに長く奉職し，日本バドミントン協会の創立にも関わった安村は，87件の記録資料と21箇所の取材を基に，1993年3月『YMCA年表；体育事業を中心に1842年～1990年』[9]を編集発表した。安村の年表は出来事の全てに出典を（　）で付した貴重なものであり，本論における経時的な軸は彼の記述に基づいてその出典を確認することで設定できた。大正12年を前後する時期の関係者及び関係事項の時系列を以下にまとめてみる。

1873年？－〈インド駐在の英国陸軍将校，プーナ（後のバドミントン）をイギリスに伝える〉（ス事0258）[10]

1877年？－〈英国のBeauford郷（※卿の誤り）を中心にBadmintonのルールを制定する〉（出典記載なし）

1886年5－8　神戸YMCAの前身「神戸基督教徒青年会設立」

9　大阪YMCA，体育会を組織し，体育事業を始める（大年6・キ新9－29・日23）[11][12][13]

11－3　大阪YMCA，日本最初のYMCA会館を建設（大年6・キ新9－29）[11][12]

1893年？－〈Badminton協会，Londonにおいて設立〉（テ16）[14]

1894年5－5　東京YMCA会館竣工

1896年8－23　柳田亨，神戸に生まれる。（東別174－45）[15]；後の東京YMCA体育主事

1899年？－　広田兼敏，札幌に生まれる（横177）[8]；後の横浜YMCA体育主事

1902年2－22　名古屋YMCA，発会式

3－7　石渡俊一，大阪に生まれる：後の神戸YMCA体育主事

1903年7－23　日本YMCA同盟成立（日109）[13]

1913年1－11　神戸YMCA会館落成；日本最初の大講堂兼室内体育館

1913年10－　F.H.Brown（New Briten YMCA Conn.U.S.A）来日，日本YMCA同盟名誉体育主事兼東京YMCA名誉体育主事となる（東149）[16]

1914年3－　広田兼敏，京都工業学校夜間部林業科を卒業（横177）[8]

1916年10－1　横浜YMCA会館落成，室内体育館を設置（日165）[13]

10－20　横浜YMCA新会館完成記念体育運動会，指導＝F.H.Brown（プ記）[17]

1917年5－　東京YMCA体育館完成，日本最初の室内総合体育館（東147）[16]

1918年？－　W.S.Ryan，横浜YMCAに日本初の体育リーダー会をつくる（ラ資）[18]

1919年6－　広田兼敏，横浜YMCA職員となる（横177）[8]

？－　名古屋YMCA「第1回体育指導者講習会」指導＝F.H.

Brown, W.S.Ryan（名53・89）[19]

1920年？－　横浜YMCA，庭球を始める（横191）[8]

1921年3－　柳田亨，東京農業大学高等科専修科を卒業

10－～12－23　日本YMCA同盟「第1回体育指導者講習会」を東京YMCAで開催，指導＝F.H.Brown, W.S.Ryan, 野口源三郎（東京高等師範学校），西村正次（東京YMCA），受講者＝14名（日211）[13]

1922年1－5　Bradley, 神戸YMCA体育主事となる（神青22－4）[20]

4－1　小山朗，神戸YMCA体育部職員となる（神青22－4）[20]

5－2　増田健三，大阪YMCAを辞任，名古屋YMCA総主事となる（大17）[21]

5－21　横浜YMCA，大日本体育協会主催「バスケットボール・バレーボール選手権」バレーで優勝，「極東オリンピック大会」の出場権を獲得（横青11－5）[22]

5－　神戸YMCA，新会館建設，地下に80坪の体育場を併設（先52）[23]

10－16・17　名古屋YMCA，「体育講習会」を開催，指導＝F.H.Brown，西村正次（東京YMCA）（名56・京青23－6）[19][24]

11－20　柳田亨，東京YMCA職員となる（東別174－47）[15]

？－　広田兼敏，高島為雄の後任として，体育主事となる（横176）[8]

1923年9－2　《関東大震災》東京，横浜YMCA会館焼失（東177）[16]

1924年2－3～29　神戸YMCAで主事講習会，参加者による「体育実演会」，出演者＝柳田亨，広田兼敏，小山朗，Bradley, Brown，笹倉，宮本，春藤（広資）[25]

4－　松葉徳三郎，大阪YMCA体育職員となる（大190）[21]

9－　竹内伝一，大阪YMCA体育主事となる（大190）[21]

10－　W.S.Ryan，休暇を終え帰日，神戸YMCA体育主事となる（ラ記）[26]：W.S.Ryan，滞米中にサマースクールに出席，Bachelor of Physical Educationを取得（本人資料）

10－26　横浜YMCA「外人Businessman Club」を創設（横554）[8]

12－8　東京YMCA理事会はF.H.Brownを名誉主事に任命（東204）[16]

12－20　名古屋YMCA新会館完成（日247）[13]

1925年2－1～21　横浜YMCA［日本YMCA同盟主催「第2回主事養成講習会］開催，修了者＝36名，東京の柳田，大阪の松葉等参加（日249，東青25－3，東別174）[13][27][15]

2－　神戸YMCA「ゲーム講習会」，講師＝奥村龍三，小山朗，W.S.Ryan（神青25－2）[20]

2－16　神戸YMCA「体育講演及び実演会」講師＝Dr.木下東作，W.S.Ryan，参加者＝400名（神青25－3）[20]

12－5　大阪YMCA会館完成，3階に体育室（大203，大青25－8，26－12）[21][28]

1926年6－12　F.H.Brown，休暇を終え帰日

（プ記，東204）[17][16]，合同懇談会で米国のスポーツ事情を語る。参加者＝30余名（東青26－7）[27]

7－30～8－1　御殿場東山荘「第3回体育主事協議会」バレーボールのルール統一，身体検査について検討，参加者＝11名（東青26－8，神青26－9）[27][20]

7－　横浜YMCA，会館の増築開始（横556）[8]

11－15　F.H.Brown，東京青年11月号「体育研究ノート；体育の目的・美しいスポーツマンシップの要約」掲載（東青26－11）[27]

12－15　柳田亨，東京青年12月号「体育の民衆化」発表（東青26－12）[27]

1927年5－16　横浜YMCA，会館増築完成（横556）[8]

7－　東京YMCA，体育館改修工事完了（東552，東体55）[16][29]

夏－　第1回世界YMCA体育大会，デンマーク・コペンハーゲンで開催（YPh234・東青27－2）[30][27]

11－　柳田亨，欧米体育状況視察，NielsBukh体操高等学校に留学。（東別174）[15]

？－　西村正次（東京YMCA），名古屋YMCA体育主事に転出（増51）[31]

？－　加藤正勝，名古屋YMCA体育事業担当に（名79）[19]

？－　名古屋YMCA「バドミントン」を始める（名90）[19]

1930年6－6　F.H. Brown（日本YMCA同盟）17年間の奉仕を終え帰米する。（49才）Wisconsin州YMCA少年体育主事に就任する。（プ記）[17]

1932年？－　［H.S.Sneyd（横浜YMCA）20年の奉仕を終えCanadaに帰国する］（横163・557）[8]

以上長い年表の抜粋を試みたが，これは，1）かなり詳しい記録の残るYMCA関係資料の中にあって，事バドミントンに関しては「名古屋YMCA，バドミントンを始める。」という記述が1927年（昭和2年）に突然出てきたこと，2）広田の言うバドミントンの始まりが大正12年頃であったということの二つの関係を，以後検証していくためである。

さて現存するYMCA関係資料の中で，1927年に次いでバドミントンに関係する記述が見られるのは，昭和8年の次の二つである。

1933年時期不祥　大阪YMCA「バドミントンクラブ」を開設する（大245）[21]

1933年11月　横浜YMCA「バドミントン」を始める（横559）[8]

1933年以降については，広田が1936年7月にベルリン・オリンピックの見学を契機に訪欧し，バドミントンを習得したというNiels Bukh国民学校に入学（横177）[8]している。また，石渡俊一が同9月に神戸YMCAの体育部嘱託になり，1937年の体育事業として5月からバドミントンを取り上げ，6月からは定着した形でクラブ形態の活動を実施していったことが，同年の「事業報告」（神事36）[32]や『神戸青年』の記事から確認することができる（神青37－7）[20]。

※1937年5月　神戸YMCAの「新興ゲームバドミントン練習開始さる！！！」『神戸青年』5月号，昭和112年p.15。この練習会はその前年に体育部嘱託となった石渡俊一によるものであることが『同』6月号の記述によって確認される。

すると問題は，やはり，広田の言う大正12年頃の関東大震災を前後する頃のことになる。ここで，一旦広田の言を脇において，昭和2年に始められたという名古屋YMCAでのバドミントンに注目してみたい。別の資料がある。この時期に大阪YMCAの体育主事を務めた松葉徳三郎（故人）の私的な手紙である。この手紙は，昭和50年代に，大阪府バドミントン協会理事長の職にあった青木昭二に宛てられたもので(昭和52年9月16日付)，その内容は，丁度，上記年表（抄）で〈1919年（月不祥）：名古屋YMCA「第1回体育指導者講習会」指導＝F.H.Brown，W.S.Ryan（名53・89）[19]〉と記載されたものに一致する。そして，同年6月に広田は横浜YMCA職員となっている(横177)[8]。広田がこの指導者講習会に参加していたかどうかは確認できない。講習会への参加を語らない彼の言からすれば，あるいは参加していなかったことも推測できる。松葉は青木に宛てて次のように記述している。

私がバドミントンを習ったのは大正8年11月のころだったと思う，東京YMCA体育部名誉主事として名古屋，京都，大阪，神戸，福岡などえ指導に巡回されたF・H・ブラウン氏からコーチを受けた。これが私がバドミントンを受けた最初であると思う，その時一緒にコーチを受けた小川，石脇さんなどは亡くなられた，その後大正10年4月大阪YMCA体育部見習いとして就職してから川崎策実さんと練習するようになり，レクレーションの程度で行ったまでで大阪YMCAバドミントンクラブという名称で行ったが発展せなかった。その後，私が13年5月1日応召するまで続いた。この前にも関西大学にバスケット部，アメリカンフットボール部を創設したので残念ながらバドミントンには手が伸びなかった。その後，18年9月末退役になるまで後輩の方々のお世話になっている。

（関西トレーニング研究所　松葉徳三郎）

松葉の資料からは，YMCA関係資料では確定できなかった名古屋YMCAでの「第1回体育指導者講習会」の開催期日が，大正8年（1919年）11月であったことが確認される。バドミントンを競技の形態として指導したのは，F.H.Brownであったこともわかる。あるいはこれが我が国における組織的な形で行われた正規のバドミントンの初めての紹介であったのかもしれない。これを本論における重要な仮説としよう。

松葉はこの手紙を「前略」と書き出し，「手が不自由で乱筆になりましたので，よろしく御判読下さいますよう，お願いいたします。」（昭和52年9月16日付け）と添えられているが，それでも読んでもらえたかどうかが不安であったらしく，青木のところに手紙に書いた趣意を再確認する電話を入れている。青木はその電話を受けて松葉の訴えたかった内容を「日本バドミントン協会広田兼敏氏の記録によると松葉氏のメモは全部間違いなり」とメモしている。つまり，広田は，「大正8年11月にブラウンによる指導があり，それを松葉らが受けて大阪でバドミントン活動を始めたという話は誤りだ」と周りの人達に言っていたというのである。「松葉は嘘つきだ」となじられたともいう。

敢て記録には残らない感情的な発言までも出してみた。この当時，東京YMCAにあってF.H.Brownと共に活動していた西村正次が，その後名古屋YMCAに転出したのは1927年（昭和2年）である。後に西村の同僚であった吉村欣治は『名古屋YMCA60年史』[33]を著し，その中で昭和2年の名古屋YMCAでのバドミントンを次のように記述している。

大正8年（1919），11年，14年（5・21～27），昭和2年に，ライアン，ブラウンの指導による体育指導者講習会は，野球，庭球，

水泳，マラソン等に力を入れていた教育界に新風を送り，名古屋体育会に新しい分野を開拓したのであった。(中略)バドミントンは昭和2年，ラケット，シャトルコックの国産品が無いので，上海から英国製を取り寄せた。それから高価な外国製品を買うことができないので，それを見本に東京の美津濃運動具店に造らせることにした。これが恐らく日本人の間でバドミントンの競技をした初めであろう。その後，横浜，東京，神戸，大阪で行われるようになった。

吉村の記述によれば，大正8年当時の名古屋YMCAは黄金時代を迎えていたという。丁度この年から瓦町会館（大正14年完成，木造3階，1485平方メートル）の拡張計画が発表されて，財団法人が設立され，募金が開始されている。拡張による新会館の建設中に関東大震災（大正12年）が襲い，募金を投げ打って東京YMCA，横浜YMCAの救援活動が行われている。こうした状況はせっかく紹介されたバドミントンがプログラムとして定期的に展開される機会を逸する条件となったことであろう。しかし，これは推測の域を出ていない。こうして，名古屋YMCA瓦町会館の設計は耐震性会館に変更され，大正14年に竣工。昭和2年のバドミントン教室の開講へと繋がるのである。

広田の「我が国のバドミントンの始まりは大震災の前後」という意味内容が大正8年までを指さないのではないか，という説がこうして論証される。そして，次のようにも考えられる。少なくとも，大正12年の大震災前後において，当時の横浜YMCAの状況から推して，スポーツ関係の活動種目としての，バドミントンの可能性はなかった，と。

なお，広田は『バドミントン界』の特別寄稿「夜明けの時代をふりかえって；わが国バドミントンの発祥と協会発足の回想」[34]の中で「昭和14年に筆者が大阪YMCA松原体育指導主事，神戸YMCA石渡体育指導主事にバドミントンを講習指導した」と記しているが，以上の論証からみて広田の我国におけるバドミントンの歴史認識と内容認識については誤謬があると指摘せざるを得ないであろう。

3－2)【要件2】「先ず横浜・神戸在住の外国人によってはじめられた。」とする問題について

この問題設定は多義的で検証が難しい。それは'バドミントン'ということばの記号と意味内容の恣意的な結合による成立の問題を孕んでいるからである。'バドミントン'が正規のルールを持つものとしてプレーされるものであると規定しても，1893（明治26）年にThe Badminton Associationが設立され，統一ルールが制定される以前にもOfficialなルールであると呼ばれたルールが，1877（明治10）年以来存在している[35]からである。'バドミントン'が羽根つき遊びまでを含意しているとすれば，我が国で行われた外国人による羽根つきの記録は，江戸時代末期の長崎出島のオランダ人商館の「南蛮図」[36)37)38)39]や森島中良著の『紅毛雑話』[40]を拾えるだけでなく，更に維新に近い時期のワーグマンによる『ザ・ジャパン・ポンチ』[41]の挿し絵の中にも見ることができる。特にワーグマンの「The "Recreation Club" Tokyo」と題する絵（図－1）の中には，当時の江戸における東京クラブの'外人'の日常の生活の中の'バドミントン'(未だバドミントンとは呼ばれておらず，バトルドアー＆シャトルコックBattledore & Shuttlecocksであった）がスケッチされており，こうした風景は明治・大正の時代にも変わらない姿で散見されたことが想像される。ただし，「バトルコック＆シャトルドアー(Battlecock & Shuttledore, 1865年)」と題された絵（図－2）には，外交ルールを無視する日本の為政者の態度を「しっちゃかめっちゃか」であると揶揄しているところを見ると，既にルールを持つ

図－1　1882年，東京に居留する外国人のレクリエーション・クラブの中の様子を描いたカリカチュア

図－2　1865年，最も古くさい領事と市参事会のバトル・コック＆シャトルドアー

'バドミントン'に近い羽根つき遊びが行われていたことも推測できる。

広田が，ルールを持つゲームとして印象づけられたのは，KR&AC と YC&AC のインターポートでのゲームであるが，若干の資料[42]によれば，この交流会におけるバドミントンの始まりは，少なくとも昭和13年以前に開始されたと推定される。確定できないのはこの事項に対する資料が提示されていないこと，更に KR&AC と YC&AC いずれの記録にも確かな記述がないこと，当時のこうした記録を残す可能性のあった YMCA 関係の記録にもないことが大きな理由である。

大きく年代を異にする説としては，棚田真輔（神戸商科大学）は「神戸 KRAC では昭和4（1929）年頃に，横浜 YCAC とのインターポートマッチの中にバドミントンを入れて実施している。」[43]と記述しているが，資料は提示されていない。推量される資料は神戸 KR&AC 資料であるが，確認はできなかった。この

事項は『神戸青年』でも確認することはできなかった。棚田の昭和4年頃という説は，広田の昭和6・7年に近い。なお，確実な記録としては，『神戸青年』の記録による昭和14年10月18日にKR&ACと神戸YMCAメンバーの対戦があり，KR&ACのナンバー2・3に神戸YMCAメンバーが負けている[44]。しかし，『神戸青年』の昭和10年以降の発行については，定期的な刊行ができず欠番があること，しかもそこに保存の欠落があることが重なって，昭和14年10月18日のKR&ACと神戸YMCAの対戦をバドミントンの始まりとすることも，昭和13年以前の交流会をバドミントンの始まりとすることも，資料の上からは難しい。確実なことは，昭和14年10月18日にKR&ACと神戸YMCAメンバーによるバドミントンの対戦があったという記録による事実だけである。しかし，この日時の記録は，我国の組織的なバドミントンの始まりを論じるには余りに時代が後に来すぎている。絞られている問題は「大正8年にブラウンによって名古屋YMCAでバドミントンの講習会が行われたこと」,「昭和2年に名古屋YMCAでバドミントンの活動が開始されたこと」の前の歴史を何処迄遡れるか，なのである。

こうして，広田に組織的なバドミントン活動の動機を与えた歴史事項が，我国の組織的なバドミントンの始まりを論じる根拠にはなりにくいことが，わかる。

（【要件4】の昭和6・7年のインタポートの試合についての検討はこの項で終わる）

3－3）【要件3】「用具は自国（外国人の）から取り寄せたもので，コートは家庭の庭に作られた。」とする問題について

記録に残る我国のバドミントン用具に関する記事を拾う。事由は，広田の関係した日本バドミントン協会編『バドミントン講習会用テキスト』[45]に「1921（大正10）年10月休暇旅行を終えた横浜YMCA名誉主事S.スネード氏（在日1913－30年）が米国YMCAより寄贈されたバドミントン用品を持ち帰る。横浜YMCA体育主事広田兼敏氏（1899－1981）にこれを渡し，東京YMCAにも分けた。」とある内容の歴史時間的な意味を検討したいからである。この記述に至る広田の語りにはこの出来事が，プレーというものに視点を置いたときに日本におけるバドミントンの始まりという認識があるからである。確認しなければならないのは，大正10年における日本においてなされた競技バドミントンと日本人によるバドミントンについてである。

資料1：「1902（明治35）年ごろ　朝倉という人が英国より用具をもち帰ってきた記録がある。しかし，それらがどのように行われたかについては不明である。」[42][46]

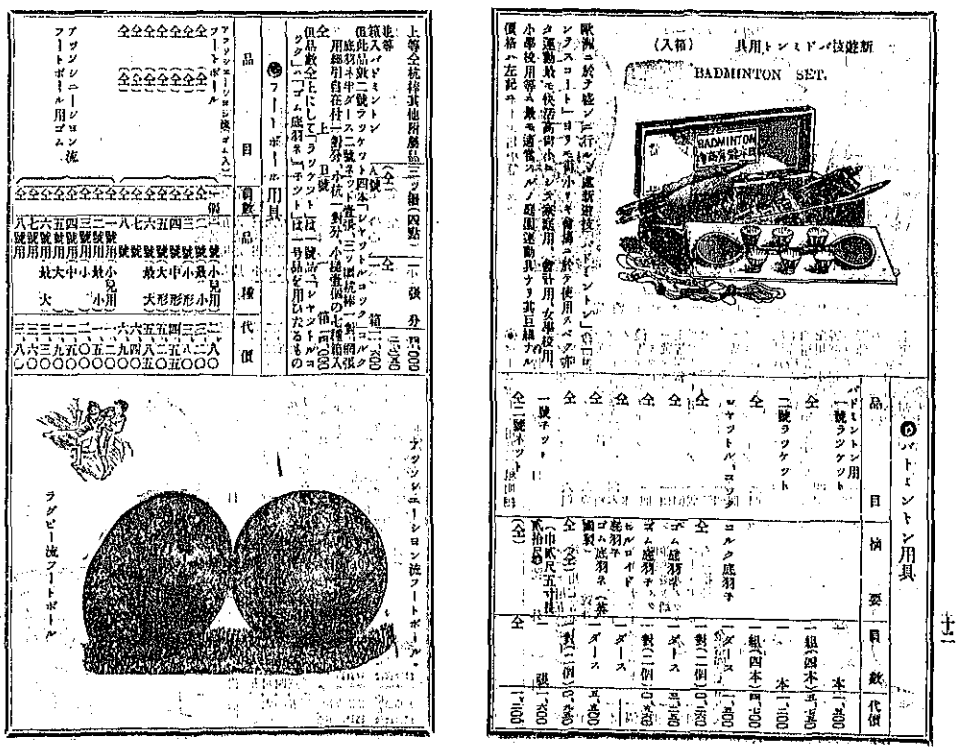
資料1に関しては，日本人がバドミントン用具を用いて遊んだ確実な証拠にはなるが，ルールを導入した組織的ゲームであることの確証にはなならない限界がある。

資料2：1918（大正7）年　「「大正7年求ム」と箱書きされた国産ラケットの存在」「新潟県南蒲原郡田上町，田巻恒彦氏で大正7年製のラケットが発見された」（1979年12月16日付『新潟日報・日曜版』，東京本郷美満津商店製造の刻印があり，当時の金で25円也とある：次頁写真）。

資料2に関しては，ネットの存在することから，一応競技形態の前提の一つが設定されていることが確認出来るが，スコアリングに至る迄，競技ルールが適応されていたかどうかを確認することはできない。しかし，資料1の状態より明瞭に，正規のバドミントンに近

付いていることは想像にかたくない。

この二つの記録は，いずれも広田の記述する用具との出会いよりは早い。しかも，いずれも日本人によるところのものであることが注目される。資料2に限れば，大正7年には美満津商店で既に国産のバドミントンラケットが製造されていたことが知られる。国産ラケットに関しては，これまで「1928（昭和3）年ナルト・スポーツが東京品川にテニス・ラケットのフレームを造る工場を設立，昭和4年に横浜市西区東久保に工場を移転した後，昭和8年から我が国初のバドミントンラケットの製造を開始した」とする説が通説になっていた[47]。しかし，資料2の出現は，このナルトスポーツ第1号説の根拠を否定しさる。さらに，資料2のラケット等の用具の価格に注目してみると，シャトル，ネット等を含めて，1セットの価格が25円也とあったのに対して，更に古いと推定される年代不詳の文献；'日本体育商会のカタログ'が大熊廣明によって所蔵されている。この資料は『日本体育商会総目録』（年代不詳：図－3）と題されており，ここには，輸入シャトル・コックに次いで国産バドミントン用具1セットの価格が11円60銭と紹介されており，価格の低いことを以てさらに時代を遡ることが許されるなら，美満津商店の大正7年以前にも既にバドミントンラ



図－3　『日本体育商会総目録』（年代不詳，大熊廣明所蔵）におけるバドミントン用具価格表

ケットの国内製造販売が開始されていたことが推定されるのである。

日本体育商会の国産バドミントンラケットの販売は，前述の吉村による昭和2年の名古屋YMCAにおけるバドミントン活動関係の記事内容(「東京の美津濃運動具店に造らせることにした」)の国産バドミントンラケットよりも相当に古い。しかし，それが何処で製造されていたのかを確認することは全く不可能であったが，こうして資料による確認事項の範囲で国産バドミントンラケットの製造販売は，大澤の主張[47]を数年遡ることになるだけでなく，ナルト商会が国産第1号だとする認識にも大きな誤りのあったことが知られた。

3－4)【要件6】「有志を集めて，ルールを翻訳した」とする問題について

広田がこの作業を行ったとされるのは，H. S. スネードが一時帰国から帰任し，バドミントン用具を米国から齎してからのことである。しかし，彼の文章から，前述のようにこの年代が確定できないのである。仮に関東大震災前後とすると，横浜YMCAでのバドミントン活動の可能性は薄い。昭和6・7年とすると，その前後での競技ルールの翻訳・解説の記録には，次のようなものをあげることができる。

資料3：ナルト・スポーツ岡藤吉『バドミントン規則書』(昭和9年3月10日発行)[48]

資料4：石渡俊一「新興ゲーム；バドミントン」[49]（『神戸青年』p. 4，昭和12年，6号）

資料3・4は，直ちに現行のルールとして適用できる程に理解され，形態が整理されているものである。広田と関係したスネードは1913年11月，ブラウンに1ヶ月遅れて来日し，横浜YMCAの名誉主事となり，1932(昭和7)年，20年の奉仕を終えてカナダに帰国している[9]。したがって，現存する競技ルール資料の作成されたいずれの時代よりも早い時期にスネードの滞在期間があり，広田のルール翻訳・解釈の意味が出てくるが，それは必ずしも名古屋YMCAの関わる大正8年，昭和2年の出来事を上回るものにはなっていない。こうした関係事実から推測されるのは，当然ルールを含めて紹介されたはずのブラウンによる大正8年の「第1回体育指導者講習会」に広田はまだ出席していなかったのではないか，ということである。昭和2年の名古屋YMCAのバドミントン活動の開始に際して，特にこのようなルールを巡る問題が起きていない様子があり，それはその後の東京YMCA，大阪YMCA，神戸YMCAでも同様に特にルールを巡る問題の発生していない様子と合わせて，スネードが必ずしもバドミントン競技の概要を知っていた訳ではないこと，広田もこの時点迄はバドミントンとの意味ある遭遇を果たしていなかったことなどが推測されるのである。

3－5)【要件7】「間もなくベルリンオリンピックを契機に訪欧(昭和12年)。オレロップ体育大でバドミントンを実習した」とする問題について

既に反復してきたが，広田のバドミントン活動への参加は，大正8年，昭和2年の名古屋YMCAのそれには及ばない。しかし，ベルリン・オリンピックを契機にした彼の訪欧は，バドミントンへの動機づけと合わせて，やがて日本バドミントン協会誕生後の多くの協会人を育てる大きなエネルギーになっている。したがって，はじまりの時にはタイム・ラグがあったが，大きく協会組織を育成することにあっては，かけがえのない働きをなしたといえるだろう。

3－6)【要件8】「昭和初年，YMCAで帰国したブラウン氏に代わり横浜在住の

外人のビジネスクラスを指導。この中にYC&ACのプレジデント；ヘセルタン氏がおり，たまたま出た話からバドミントンの交流試合が行われた」とする問題について

ブラウンは，1913年10月に来日，日本YMCA同盟，東京YMCAの名誉体育主事に就任，1930年6月17年間の奉仕を終えて帰米している（49歳）[9]。彼は，黎明期の我国のスポーツ振興，とりわけオリンピック・ムーブメントへの参加に大きな影響を与えた（ブ記）[17]。彼の離日は昭和5年である。広田のいう「昭和初年」が昭和5年までを含意できるかどうかは不問にするとして，少なくともヘセルタンとの間のバドミントン交流は昭和5年以降であったことが確認される。これも，広田のいう「昭和初年」頃のことではあったが，名古屋YMCAのはじまりを遡れるものではなかった。

4．広田が伏せた歴史事実

4－1）『横浜青年(p.6，昭和8年10月号)』[50]記事の存在

いずれのYMCAにおいても，様々な理由から，既刊の『○○青年』等の機関誌を全冊揃えることは難しくなっているようだ。横浜YMCAにしても同様のことが言える。1990年を前後して行われた横浜YMCAの在庫の整理においても，昭和10年前後の資料は，'大正時代より昭和の初期'という括りの中でかろうじて幾つかの文献を渉猟できる状態である。この中に書き込みのある昭和8年10月号『横浜青年』の記事（p.6）が残されていた。体育部の先月の活動報告と次月の予定が掲載されている頁に「9月13日の総主事会での決議事項」として「バドミントンを9月下旬より新しく試みる事」が報告されて，「バドミントン・ゲーム開始」の予告がなされたなかで，鉛筆の書き込みによる一つの'書き直し部位'が見つけられたのである。書き直された内容は，「バドミントンを初めて試みる……　昭和8年10月　当○○○写真を入れる事」で，書き直した内容は「東京，名古屋のYMCAで数年前から試みられてゐるが，今秋から当体育部でも新しく試みてゐる軽いラケットで追羽根をつく様なゲームで規則は排球の簡単化したようなもので，手軽に面白く出来るのが此の特徴である。当分左の通り練習時間を定めて練習してゐる多数参加されん事を。　云々。」とあり，編みかけ部分を書き直された内容と差し違えるように指示されているのである。しかし，編みかけ部分を替えてみたが，「でも」は残ってしまった。広田は，この時点で「横浜YMCAが決してバドミントンを最初に始めるのではない」ことを充分に認識していたのである。

4－2）不十分な資料の中から一つの仮説を提案する

これまで，競技ルールを中心にした所謂競技バドミントンの我国における始まりは，1972年No.33『バドミントン界』[4]において広田の語る歴史認識によって，ほぼ決定されてきていたといっても過言ではない。日本バドミントン協会の創立50周年を記念して出された協会の正史ともいうべき財団法人日本バドミントン協会編『創立50周年記念誌』[51]においてさえ，この歴史認識を敷衍しているのである。本論では，広田のバドミントン活動の基盤となったYMCA活動の関係資料に当たりながら，その傍証を他分野の資料に求めて，我国のバドミントンの始まりが横浜YMCAではないことを検証しようとした。直接的には二つの文献群，1）『名古屋青年』を引用した吉村欣治著『名古屋YMCA60年史』[19]，安村正和著『YMCA年表』[9]と，2）昭和8年10月号『横浜青年』の記事と書き込み記事（p.6）[50]の所在によって，次のことを仮説する事が出来た。すなわち，我国で初めて日本人が参加する形で，正規のルールによるバドミントンが紹介

されたのは，1919（大正８）年11月の名古屋YMCAにおける「第１回体育指導者講習会」であり，これを指導したのはF.H.Brownである。また，日本人による最初の組織的なバドミントンの指導の始まりは，昭和２年の名古屋YMCAにおけるプログラムである。

５．まとめ

横浜YMCAに「第１回YMCA内バドミントン大会成績」と題された昭和13年２月18・19日付けの手書きの文献が残されており，「今井君の初優勝」が報告されている。日本のバドミントンの協会活動の礎を築いた今井先の最初の記録である。広田の名と共に今井，森友など協会組織の形成に尽力した人達が，この横浜YMCAを中心に育った。資料３でみた昭和９年『バドミントン規則書』を印刷・発行したナルト・スポーツの岡一族は，バドミントン用具の製造だけでなく，それを広く普及させるために市街地に出て普及発展に努めた。最初の協会組織はナルトのグループを中心に創立されている。国内組織が結成され，全日本バドミントン競技会が開催されるようになった時，この二つのバドミントン母体は覇権を競って拮抗している。最初に勝ったのは岡一族であるが，大学への普及など後に大きな道を開いたのは，横浜YMCAのグループである。この二つの群の間にあって，大阪・神戸のグループもよくがんばっていた。こうした戦後の流れの中で，最初の協会組織を束ねたのは，戦前上海やインドネシアなど海外でバドミントンを愛好した一群の人達であった。このために，幾つもの勢力が決定的な主導権を確立する事なく，協会組織の黎明期が推移していってしまった。こうして，我国のバドミントンの始まりの時は，曖昧になっていってしまったのである。そしていつしか，横浜YMCAの活動が始原的に語られるようになっていってしまっていた。しかし，この文脈には，正当な歴史性はない。二群の歴史資料の検証によって，我国のバドミントンの始まりを，次の二つの出来事として仮定する事ができる。

すなわち，我国で初めて日本人が参加する形で，正規のルールによるバドミントンが紹介されたのは，1919（大正８）年11月の名古屋YMCAにおける「第１回体育指導者講習会」であり，これを指導したのはF.H.Brownである。そして，日本人による最初の組織的なバドミントンの指導の始まりは，昭和２年の名古屋YMCAにおけるプログラムである。

引用・参考文献

1）福田茂：「文献で見る日本バドミントン協会誕生までの歴史」；平成７年度筑波大学体育専門学群卒業論文

2）THE INTERNATIONAL BADMINTON FEDERATION : I·B·F HANDBOOK, p187, 1961-62

3）・大阪バドミントン協会：五十年誌，1997
・岡山県バドミントン協会：岡山バドミントン五十年，1998
・神奈川県バドミントン協会：60周年記念誌，2001
・群馬県バドミントン協会：バドミントン三十年史，1981
・群馬県バドミントン協会：バドミントン群馬－集合版－，1989
・新潟県バドミントン協会：バドミントン四十年史，1991
・会津バドミントン協会：創立四十周年記念誌，1992
・静岡県バドミントン協会：静岡県バドミントン協会三十周年記念誌，1976
・宮城県バドミントン協会：協會創立三十年誌，1978
・北海道バドミントン協会：北海道　シャトルの軌跡　創立40周年記念誌，1988

・岐阜県バドミントン協会：創立45周年記念誌　シャトルへの追憶
4）広田兼敏：「ワイド版　ばどみんとん昔むかし　黎明時代とミナト横浜」；バドミントン界，No.33；6．pp20-24，1972
5）㈶日本体育協会編：「加盟競技団体略史・日本バドミントン協会」；日本体育協会75年史，pp690-694，㈶日本体育協会．1986
6）伊藤基記：体育図書館シリーズ11　バドミントン上達法，pp12-17，不味堂出版．1972
7）関一誠，藤田明男，蘭和真：バドミントン教室，pp9-10，大修館書店．1989
8）大和久泰太郎著：横浜YMCA百年史，横浜キリスト教青年会．1984
9）安村正和：YMCA年表　体育事業を中心に　1842年～1990年，1993
10）岸野雄三編：「最新スポーツ大事典＝資料編」大修館書店．1987
13）奈良常五浪(ママ)著「日本YMCA史」YMCA出版．1959
14）鳴海正泰著：「テニス明治誌」中公新書592，中央公論社．1980
15）別冊東京青年（機関誌・東京YMCA）
16）斉藤実著「東京YMCA100年史」東京キリスト教青年会．1980
17）F.H.Brownの記録．北米YMCA同盟．日本YMCA同盟
19）吉村欣治著「名古屋YMCA60年史」名古屋基督教青年会．1964
20）神戸青年（機関誌・神戸YMCA）
21）滝口敏行著「大阪YMCA100年史」大阪YMCA，1982
23）兵庫県バスケットボール協会50年史編集委員会編「先賢の跫音」標語KRNNバスケットボール協会．1985
24）京都青年（機関誌・京都YMCA）
25）広田兼敏氏所有資料
26）W.S.Ryanの記録．北米YMCA同盟．日本YMCA同盟
27）東京青年（機関誌・東京YMCA）
28）大阪青年（機関誌・大阪YMCA）
30）E.L.Johnson / The History of YMCA Physical Education / Association Press / 1979
31）増増健三著：「蜂を飼うより青年を培え」増田健三．1956
32）神戸YMCA事業報告
33）吉村欣治：名古屋YMCA60年史，pp89-90，名古屋基督教青年会．1964
34）広田兼敏：「夜明けの時代をふりかえって　わが国バドミントンの発祥と協会発足の回想」；バドミントン界，No.39；5．pp6-7，1976
35）BETTY UBER：THAT BADMINTON RACKET，HUTCHINSON'S LIBRARY OF SPORTS AND PASTMES，1949
36）長崎市立美術館所蔵：長崎阿蘭陀屋敷図
37）神戸市立美術館所蔵：長崎漢洋居留圖二巻，1699
38）神戸市立南蛮美術館図録編集委員会編：神戸市立南蛮美術館Vol.II，神戸市立南蛮美術館．1969
39）臼杵正巳編著：「長崎唐蘭館市街図絵巻，バドミントン島」；佐渡バドミントン協会四十周年記念誌，1990
40）森島中良：紅毛雑話，1787
41）C.Wirgman：ザ・ジャパン・ポンチ，1865～
42）岸野雄三，多和健雄編：スポーツの技術史，pp625-635，大修館書店．1972
43）棚田真輔：スポーツ人風土記　兵庫県（下巻），pp338-341，道和書院．1975
44）神戸青年，No.9．p11，1939
45）日本バドミントン協会編：バドミントン講習会用テキスト，1952
46）栗本義彦監修・伊藤基基，相馬武美，菊池利明ら：バドミントン教本，不味堂．

1964
47) 大澤渉：「見本頼りに総員かかれーナルトスポーツが“国産”第1号」；バドミントン界，No.42；4．pp18-21，1973
48) 岡藤吉編：バドミントン規則書，日本バドミントン協会事務局ナルト・スポーツ岡藤吉．1934
49) 石渡俊一：「新興ゲーム；バドミントン」；神戸青年，No.6．p4，1937
50) 横浜青年，No.10．pp6，1933
51) (財)日本バドミントン協会編：創立50周年記念誌，(財)日本バドミントン協会．1997

注：8)，10)～32)は，9)安村による引用・参考文献・資料等略語表よりそのまま引用した．11) 12) 18) 22) 29)は，掲載されていなかった．また，13)は，正しくは{奈良常五郎：「日本YMCA史」，日本YMCA同盟出版部．1959}であると考えられる．